みどりとひと

SUGINAMI CITY

みどりの新聞　平成19年12月20日　発行　No.142

連載 みどり再発見

高円寺寺町のみどり散策

▲立派な山門が続く通称「寺町通り」のみどり

◀立派なダイオウショウの大木

▲静寂がただよう裏通り

青梅街道と環七通りが交差する高円寺陸橋の北西エリア・高円寺南二丁目には、幹線道路の近くとは思えないほど閑静で、しかも緑豊かな「高円寺の寺町」と呼ばれている一角があります。区立杉並第八小学校と光塩女子学院に囲まれるように、曹洞宗のお寺が六つ（長龍寺、鳳林寺、福寿院、西照寺、松応寺、宗泰院）、日蓮宗のお寺が一つ（長善寺）、合わせて七つものお寺が隣り合って集まっており、独特の風情を醸し出しています。いずれも約四〇〇年の歴史をもつ由緒あるお寺で、明治の末から大正にかけて、都心から移転してきました。

この一帯は、かつては雑木林や田畑が広がっていたそうですが、現在は雑木林の面影が一部残っているほか、それぞれのお寺が創意工夫を凝らした樹木や草花が繁茂し、行き交う人々の目を四季折々楽しませてくれます。

表通りや路地裏からは、ケヤキ、サクラ、イチョウ、エノキ、イロハモミジ、サワラ、アカマツ、スダジイ、シキミ、シラカシなど、いずれも立派な古木が観察できます。とりわけ、葉が二〇～三〇センチと長いことで知られるダイオウショウ（大王松、マツ科）の勇姿は、しばし足を止めてしまうことでしょう。山門からのぞき見る境内には、ユニークな盆栽仕立てのイヌマキや、立派な大木のカクレミノなどをはじめ、シダレウメ、ナツツバキ、さらに紅葉が美しいミツバツツジやオオモミジ、ニシキギなども鑑賞できます。

取材では、たまたまお会いしたお寺の方から「どうぞ」との言葉をいただきましたが、敬虔（けいけん）な心で一声かけて境内も奥深く散策すれば、さらに多彩な緑を満喫することができるでしょう。

専門家に聞く 園芸ワンポイント

指導 森　正 先生

みどりに関する専門相談は
塚山公園みどりの相談所
TEL 03−3302−9387（毎週土・日曜日）

冬のバラの手入れ

■ 剪定

冬期剪定（12月～2月）のねらいは、5月の花を大きく立派に咲かせること、また、枝･幹の更新と樹形（大きさ、姿）を整えることです。

1.幹の更新

一般的には、新しくて太い枝に大きな花が咲きます。したがって古くて疲れた幹には新しく太い枝は期待できず、立派な花をつけることが困難になります。昨年伸びたシュート（根ぎわから出る太い枝。将来の主枝となる）があれば老化した幹と取り替えます。

2.枝の更新

枝は上へ伸びるに従って細くなります。切り戻し剪定（＝切り返し剪定。枝の途中で切りつめ、樹形を小さくする）を行い、太く新しい枝を出します。

3.枝の切り方

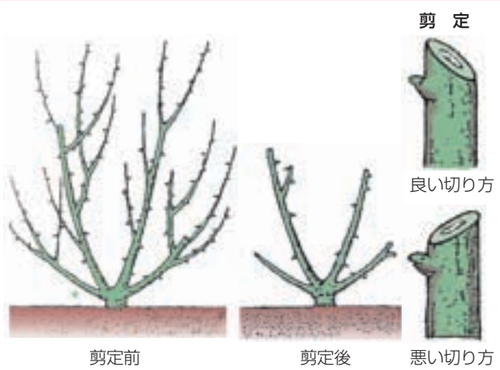
シュートの場合は新しい幹となる部分です。枝分かれさせたい高さのところで、外芽を残して切ります。シュート以外の枝では、前年枝の下部の数芽を残し、外芽で切ります。そのほか不要な枝、細い枝、枯れかかっている枝を切り落とします。

■ 施肥

バラの下部の根張りの周辺部に溝を掘り、あるいは数ヶ所穴を掘り、肥料を埋めます。肥料は遅効性、緩行性の堆肥、油かす、牛糞に骨粉を混ぜて施します。量や配合についてはバラの株の大きさに合わせて決めます。

■ 薬剤散布

バラは病虫害に侵されやすい花木です。冬の間に病虫害防除のための薬剤散布が大切です。石灰硫黄合剤の7～10倍液を、1～2月の間に1～2回散布します。



編集後記

「みどりとひと」はみどりのボランティア杉並と協働で編集しています。

- ●今号の取材では、オンボロデジカメ片手に区内のみどりをあちこち訪れましたが、改めて「みどりの大切さ」を痛感しました。(羽)
- ●ひとつの公園でこんなに木の実がなる樹がみられるのは珍しいことです。是非見に行ってください。（吉）
- ●冬至ですね。陰の極は陽の始まり……何事も辛抱が大切と感じています。（中）
- ●今年も落ち葉の時期です。夏の暑さを遮ってくれた感謝をこめて集めます。（淳）
- ●公園のハナミズキは紅色に、五日市街道のモミジバフウは黄色、赤にうつくしく、秋の終りを飾っています。秋空にはらはら落ちる木の葉に感謝するこのごろです。(山)

みどりの新聞　みどりとひと142号　平成19年12月20日発行
編　　集／みどりのボランティア杉並
編集・発行／杉並区都市整備部みどり公園課　〒166-8570　杉並区阿佐谷南1−15−1　☎ 03−3312−2111
「みどりとひと」は区ホームページでもご覧いただけます。　http://www.city.suginami.tokyo.jp/
PRINTED WITH SOYINK　大豆インク使用。ケナフ100%紙使用。

投稿　さあ、落ち葉を掃こう！

「住まいの周りは水田や麦畑が広がり、何百年の時を経て造り出された農家の屋敷林が点在し、森からアオバズクの、田んぼからトノサマガエルの鳴き声が聞こえ、湧水池ではカワセミが飛びまわっていました」

これは、私の育った上井草の50年ほど前の環境です。それから半世紀が経ち、田んぼや畑はほとんど無くなり、町には家が所狭しと建ち並んでいます。こうした町の変化に伴って、野生動物の棲家である野原や雑木林も無くなっていっています。

そんな中、町の象徴である屋敷林は、数は減ったものの、未だに風格ある緑として残っています。しかし今、重い税負担が所有者にのしかかり、また周辺への落ち葉や日陰などの問題性を指摘する声も増えており、屋敷林の維持は大変困難になっています。杉並には、代々の当主が守り続けてきた屋敷林があり、その森を構成するケヤキなどの樹には数百年の樹齢を持つものもあります。森の樹々は、町の変遷と共に歩み、森の環境そして町の環境を守ってきています。

町が私の生まれた時代に戻ることは出来ないのは当たり前のことです。しかし、次世代の人々が健康で快適に生活が出来る環境を、私達一人ひとりの小さな緑化活動を通して維持・回復させることは出来る、と考えています。どんなに居住性の良い建物に住んでも、それを取り巻く生活環境は良くなりません。私達自身が行動しなければならないのです。

さあ、塀をやめて生垣にし、玄関の前に植え込みを造り、落ち葉が家の前で飛び回っていたらホウキを持って掃きに行こうではありませんか。

上井草在住　K.A

特集　多様な木の実が楽しめる宮前公園

区内では、樹林・竹林の双方の中を散策できる数少ない公園の一つであり、実のなる木、紅葉する木など、季節の変化を楽しめるように工夫されています。隣には<知る区ロード>の休憩場所「みみのオアシス」が開設されています。

園内では、「実が食べられる木」としてマメガキ・オニグルミ・カキ・ヤマボウシ・クリ・ウメなどが、「実のなる木」としてムクロジ・シキミ・サンシュユ・ミズキ・マユミ・コナラ・エゴノキなどが見られます。どの木にどんな実がなっているか、観察してみましょう。

宮前2-12-18（区立宮前中学校北側）

ムクロジ

▲区内では珍しい立派なムクロジの大木

落葉高木、葉は偶数羽状複葉で互生し、果実は直径約2㎝の球形で、秋に黄褐色に熟します。中に黒い種子が1個あり、楕円形で硬く、羽根つきの球として用いられました。

オニグルミ

落葉高木、葉は奇数羽状複葉で、果実は大きく多毛、中に大きな核があり、核の中の種子は食べられます。

マメガキ

古く中国から渡来し、柿渋をとるために広く栽培されています。雌雄異株、果実は直径約1.5cmの球形で、黄色から黒紫色に熟し、霜の降りるころ食べられます。

シキミ

葉は互生し、葉を切ると抹香のにおいがします。果実は約5mmで、8～12個の袋果が星形に並び、9～10月に熟すと裂け、有毒の種子を出します。

●羽状複葉
小葉が葉軸の両側に羽状に並んだ葉。

○偶数羽状複葉
頂小葉を欠く

○奇数羽状複葉
頂小葉を有する

●互生
葉が茎の各節から1枚ずつ交互に出現

みどりの窓　予告

みどりのボランティア杉並の第4期会員を募集します！

地域のみどりを守り、創り、育てていただく「みどりのボランティア杉並」第4期会員の募集を予定しています。樹木や花壇の簡単な手入れはもちろん、植物の観察やイベントの開催など、工夫次第で活動内容は様々です。

平成14年度にスタートした「みどりのボランティア杉並」は、ボランティア活動のきっかけ作りの場として、仕組の充実や活動の発展を図りたいと考えいています。募集に関する詳しい内容は、2月頃に広報すぎなみや、区のホームページなどでお知らせいたしますのでお待ちください。

緑の歳時記

杉並区内でよく見かける帰化植物

ヨウシュヤマゴボウ（洋種山牛蒡）ヤマゴボウ科

北アメリカ原産の多年草

アメリカヤマゴボウとも呼ばれ、明治の初期に渡来し栽培されたこともありましたが、現在では空き地や道ばた、造成地などに野生化しています。茎は太く赤みを帯び、高さ1～2mになり、上の方で枝を広げます。葉は長さ10～30cmの長楕円でやわらかく互生です。秋から冬にかけて紅葉してきれいです。

花期は6～9月で、わずかに赤みをおびた小さな白い花を穂状につけます。

花は直径5～6mmで、花弁はなく、白い花弁状の萼片（がくへん）が5個あります。果実は直径約1cmの扁球形で黒紫色に熟し、つぶすと赤紫色の汁が出ます。

かつてこの汁をぶどう酒や食品の着色に用いたことがありましたが、有毒とわかり現在は使われませんが、紙や布の染料になります。根も有毒ですが、若葉は食べられます。(注:野草は大量に食べず味わう程度にしましょう)

みどり探訪

ーハンドベルの音色が響く聖マーガレットのみどりー

立教女学院

杉並のみどりとそれに関わる方々をご紹介します。

ヒマラヤスギのクリスマスツリーの下から響くベルの音色―毎年、クリスマス礼拝の後に行われるハンドベルクワイアによる演奏の一幕です。

大正13年（1924）杉並区久我山に移転した立教女学院は、本年で創立130周年を迎えました。みどり豊かな学院内では、ヒマラヤスギやクスノキなどの大樹や藤棚が歴史ある建築とともに生徒の憩いの場をつくり、聖マリア礼拝堂北側のセントラルコートは、ハナミズキと芝生のグリーンが荘厳さを醸(かも)しだしています。坂下門から短期大学方面への樹林は、神田川左岸の崖線で武蔵野台地特有のハケの雰囲気が出ていて、自然林に近い林相が見られます。

区内の環境浄化に大きな役割を果たしてくれる学院内のみどりは、理科の授業やCO_2削減効果の研究対象としても利用されるとともに、放課後に生徒が集めた落ち葉は、落ち葉プールに利用したり、腐葉土にして近隣住民の方にお分けしているそうです。普段は一般の方が学院内に入ることはできませんが、寒い冬の季節にも、みどりを通した、あたたかく優しい交流を感じます。